

《フィールドだより》

「福島インドア砂場サミット (FISS)」開催報告 — 福島県から発信するインドア砂場の可能性と今後の課題 —

笠 間 浩 幸

はじめに

2013年11月15日、福島市市民会館において筆者が主催者となり、「福島インドア砂場サミット (FISS)」なる研究会議を開催した。これは、2011年3月11日の東日本大震災及び東京電力福島第1原子力発電所の事故以降、福島県内に広がったインドア砂場の関係者らが集まり、これまでの経験交流と今後のインドア砂場のあり方について議論することを目的としたものである。

「インドア砂場」とは、文字通り「屋内に設置された砂場」を表す。一般に砂場は、屋外(アウトドア)につくられるものであるが、気候や使用目的等に応じて、砂場がインドアに設置されることもある。筆者自身、2005年、釧路市に開設された釧路市こども遊学館(写真1)という、科学館と子どもの遊び場を融合した施設内に、150平方メートルの広さをもつ、わが国でも最初の本格的なインドア砂場(写真2)の設置を監修した経験を持つ。このインドア砂場は、冬期間の気候が厳しい地域においても、年間を通して子どもの遊び場として活用されており、また砂場の周囲は、子ども同士や子どもの様子を見守る保護者たちのコミュニケーションの場としても有効な空間となっている(写真3)。

その後、子どもの遊具に関わる企業等によってインドア砂場の設置が進んだが、2011年の東日本大震災以降、屋外の放射線への不安から、特に福島県内でインドア砂場をつくる動きが加速された。それらのインドア砂場は、設置者や主な対象者、目的によって、その大きさや構造等、多様なものとなっているが、いずれも子どもの成長や発達に大きな



写真1 釧路市こども遊学館



写真2 釧路市こども遊学館のインドア砂場



写真3 砂場周辺でくつろぐ親子

影響を及ぼす砂遊びを取り戻す上で大きな貢献を果たすものであった。

だが、一方で福島県内におけるインドア砂場設置の試みは、それぞれの設置者の努力に委ねられ、設置の方法や管理に関する工夫、様々な運用上の問題点と解決策等は、必ずしも共通の経験として共有されてこなかった。そのため、せっかくのアイデアや工夫が一部にとどまり、新たなインドア砂場を設置する際、それらが有効に活用されていないという問題があった。

「福島インドア砂場サミット(FISS)」は、このような状況を背景として開催したものであり、また、サミットにおける議論は、決して福島県内にとどまるものではなく、日本全国の子どもの砂遊びと子育て環境の充実・改善につながるものであった。

サミット当日は、福島県内の幼稚園・保育所から4施設、NPO法人や行政、企業等から6施設の合計10施設の事例報告の後、保育者、行政担当者、設計士、遊具設置業者、プレイリーダーなど約40名がディスカッションを行い、最後に参加者一同による「呼びかけ文」を採択して会を終了した。

本稿の目的は、サミット開催に先立って行ったアンケート調査とサミット当日の議論をもとに、インドア砂場に関する課題と可能性を考察するものであり、また、新しい砂遊び場のあり方を全国に発信する試みでもある。

1. インドア砂場事例報告施設の概要

今回、インドア砂場に関する事例報告を行った施設とその概要は以下の通りである。

①福島学院大学附属幼稚園(福島市)

2011年4月、体育館内にブルーシートを敷き、その4隅にウレタン製大型積み木を巻き込んで砂場枠にし、約12平方メートルのインドア砂場を設置。2012年度一時場所を移して活用した後、撤去(写真4・5)。

さらに翌年7月には、筆者らが中心となって取り組んだ「こども環境学会コンテナ砂場プロジェクト」の活動として、約30平方メートルの大型コンテナ砂場を駐車場に設置し、現在も活用している(写真6・7)。

②福島敬香保育園(福島市)

体育館内にブルーシートを敷き、その上に木枠で囲まれた約6平方メートルのインドア砂場を設置。体育館を運動や集団遊戯に使用するために、インドア砂場は毎月、設置と解体を繰り返しながら活用されている(写真8・9)。

③まゆみ幼稚園(二本松市)

震災後、空き保育室にブルーシートを4重に敷き、木枠で囲まれた約9平方メートルのインドア砂場を設置。木枠は子どもが腰掛けることもできる平面部が設けられる。2013年3月、園児増による保育室確保の必要と戸外での砂遊びが可能となったことから撤去された(写真10・11)。

④エムボリアム幼稚園(郡山市)

鉄骨造平屋建ての建物を増設し、2012年8月、約14平方メートルのインドア砂場が設置された。砂場周辺には、保護者がくつろぎながら子どもの砂遊びを見ることが出来るスペース



写真4 福島学院大学附属幼稚園のインドア砂場



写真5 インドア砂場で遊ぶ子どもたち



写真6 コンテナ砂場の外観



写真7 コンテナ砂場の内部



写真8 福島敬香保育園のインドア砂場



写真9 インドア砂場で遊ぶ子どもたち



写真10 まゆみ幼稚園のインドア砂場



写真11 インドア砂場と室内の様子



写真 12 エムポリア幼稚園インドア砂場の建物



写真 13 インドア砂場建物の内部の様子



写真 14 とうほうわんぱくらんどの外観

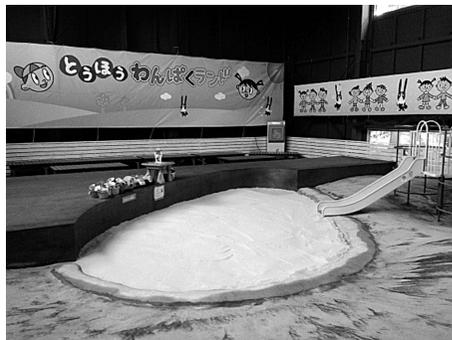


写真 15 とうほうわんぱくらんどのインドア砂場



写真 16 スマイルキッズパークの手・足洗い場



写真 17 スマイルキッズパークのインドア砂場

も確保されている(写真12・13)。

⑤とうほうわんぱくらんど(福島市)

東邦銀行の被災者支援事業として、ソフトボールの屋内練習場であった施設を屋内遊び場に改装し、2012年7月、約6平方メートルのインドア砂場が設置された。砂はホワイトサンドを使用。土の斜面やすべり台等の大型遊具、保護者らが見守ることができるスペースがある(写真14・15)。

⑥スマイルキッズパーク(本宮市)

本宮市が開設した既存の大型屋内遊び場内に、2013年7月、約36平方メートルのインドア砂場を設置。商品名「ダンシングサンド」と呼ばれる粘り気のある砂を全面に敷き詰める。お湯の出る手洗いと足洗い場が完備されている(写真16・17)。



写真 18 PEP Kids Koriyama のインドア砂場



写真 19 おじいちゃん、おばちゃんと一緒の砂遊び

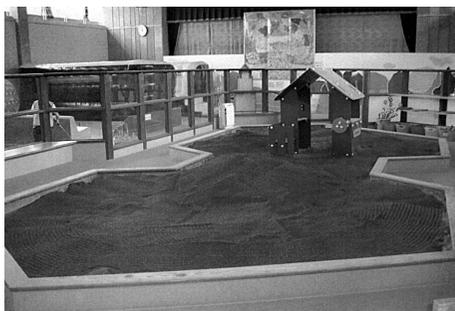


写真 20 さんどパークのインドア砂場



写真 21 お母さんと一緒の砂遊び



写真 22 伊達市ちびっこ広場のインドア砂場



写真 23 ホワイトサンドを使用した砂場

⑦PEP Kids Koriyama(郡山市)

大型ショッピングセンターの倉庫を屋内遊び場に改築し、2011年12月、その一角に、約150平方メートルの大型インドア砂場が設置された。水遊びもできる設備もある。市民の発案とそれを全面的に受け止めて推進した地域企業、バックアップした郡山市の三者共同による施設として、福島県内における大規模遊び場施設内のインドア砂場先進事例となった(写真18・19)。

⑧さんどパーク(福島市)

福島市が市民会館の体育館を大型の屋内遊戯場に改装し、2012年9月、その一角に約34平方メートルのインドア砂場が設置された。砂場内に四阿(あずまや)ふうの遊具を配置し、砂場の周囲には腰掛け、足洗い場も設置されている(写真20・21)。



写真 24 わいわいひろばのインドア砂場の建物



写真 25 インドア砂場建物の内部の様子

⑨伊達市ちびっこ広場(伊達市)

廃校となった小学校の体育館を改装した屋内遊び場内の運動器具倉庫であった一室に、2012年7月、約5平方メートルのインドア砂場を設置。砂場枠はFRP素材の小型プールを用い、乾いたホワイトサンドが使用されている(写真22・23)。

⑩わいわいひろば(白河市)

白河市が屋内遊び場と併置して建設したプレハブ平屋建ての施設内に2012年7月、約12平方メートルのインドア砂場を設置。建物はインドア砂場専用のもので、ある程度の水の使用も可能となっている(写真24・25)。

2. インドア砂場アンケート回答の分析

2013年9月25日から10月10日までの期間、前出①～⑧の施設関係者に対して、アンケート調査を行った。以下、アンケート項目に沿って特徴をまとめ、考察を行う。

(1) インドア砂場設置の理由

この問いに関する回答は、ほとんどが原発事故による放射線への不安や屋外での活動制限が理由となっている。例外として福島学院大学附属幼稚園では、震災直後、度重なる余震におびえる園児たちが少しでも安心して一緒に遊べる遊具は砂場であるという思いから、屋内に砂場を設置することを決めたという。それはまだ、県内での屋外活動制限が出る前のことであり、それほど砂遊びへの強い思いがあったというのは興味深い。

(2) インドア砂場設置を考え始めた時期

インドア砂場の設置検討を開始した時期は、大きく3つに分けられ、それぞれに興味深い背景を見ることができる。

- i) 震災直後：何よりも、砂遊びが子どもにとって重要であるという確信から、揺り動かされるようにその設置を行っている。まずはできることをできる所からやるということが優先され、アイデアを駆使して、さほど費用もかけず、手作り感の強い砂場が設置される。ただし、郡山市の PEP Kids Koriyama は、震災数ヶ月後の発案でありながら、大規模な本格的な砂場の設置が行われた点において例外である。

- ii) 震災1年後：震災から1年という節目を迎え、改めて子どもの育ちを振り返り、今何が必要なかを自問した上で、インドア砂場の設置という結論に達している。当時、すでに福島県内の幼児・学童期の子どもの運動能力や、身長・体重の増加率低下の傾向が指摘され、運動施設への関心は高まっていたが、砂場のような遊びもまた必要だと考えるに至ったところが興味深い。そこには日常生活における子ども同士のトラブルや問題行動ともいえる言動への懸念もあり、その解決策としても砂場が注目された。
- iii) 震災2年目以降：インドア砂場の経験が報じられ、その効果も一定評価されるなか、住民からの要望も相まって、特に行政主導によるインドア砂場の設置が進む。同時に、衛生管理などの取り組むべき課題も明らかになってきており、その対処法や周辺設備、砂の種類吟味等、後発ならではの取り組みがなされる。

(3) 原発事故との関係

ここでは、2011年における屋内外の放射線量と屋外活動に関する時間制限や保育の留意点、その後の除染作業や除染後の放射線量の状況、現在の屋外活動の様子について問うた。

原発事故当時の放射線量には地域毎のばらつきが大きく、その後の除染作業の進展具合、さらに保護者らの不安感などの要素は、一律の比較が難しい。

ただ、原発事故が、子どもたちの屋外活動をそれ以前と同じくすることを妨げたことは確かであり、「原発事故のもたらした影響は子どもたちの自由や楽しみを奪う最悪の結果」という記述が、回答者ら全ての思いを物語っている。

現在では、ほぼ以前に戻りつつあるところもあれば、いまだ積算線量を考慮しながら、年齢ごとに外遊びの時間を決めているところもある。また、風の強い日は、外遊びを避けたり、直接、落ち葉や土、砂に触ったりすることへの注意を払っているところもある。

なお、福島市では、数カ所にわたる保育園の砂サンプルのモニタリング調査を行い、「測定数値の砂を、毎日10g、在籍期間中(0～就学前までの7年間)食べたとしても健康に問題はない(福島市放射能アドバイザー：東北大学、石井慶造教授)」との測定結果を得ている。

このような、砂そのものの客観的な調査とデータの蓄積は、実際の安全性を確かめる上でも、また保護者や保育者・教師らの不安への対処や何らかの方策を講じる上でも大変重要であり、今後も継続的な検証が必要と考える。この点に関しては、筆者が所属する「こども環境学会」の定行まり子氏(日本女子大学教授)が、福島県内の砂場と日本各地の砂場のサンプル調査を行い、データの集積を図っている。今後、これらの研究結果を参考にしながら、砂場の放射線に関する客観的評価につなげたい。

(4) インドア砂場計画段階での問題点

インドア砂場の設置計画段階における課題としては、費用の問題とともに、どこに砂場を設置するかという場所の問題も共通してみることができた。

まず、費用に関しては、通常予算内経費(ほぼ手作りの砂場で砂のみ購入)、補正予算による支出、各種助成金や震災復興の支援を受けながらの取り組み等による捻出となっている。

次に、インドア砂場の設置場所に関する課題としては次のようなことがあげられている。

- 砂場は、砂そのものとそれを囲む空間が必要であるが、それだけの場所をどこに確保できるか。
- 特に幼稚園、保育所の場合、インドア砂場を恒常的に設置して、他の保育活動が妨げられないか。
- 砂場では相当量の砂が必要であるが、砂の搬入・搬出のルートは確保できるのか。
- 砂の重量に床板が耐えられるのか。
- 砂場の近くに手洗い・足洗い場を確保するのが困難。
- 砂埃による空気の汚れ、水の使用による床板の腐食の心配。
- 砂場の建物を新設する際、建ぺい率や周辺環境との調和、死角の発生等の問題。

実際の設置場所としては、幼稚園・保育所の場合、体育館への設置(2園)、保育室への設置(1園)、新たに増築を図っての設置(2園)となっている。

また、NPO・行政・企業等による砂場では、大型の複合的な遊び場施設の一角にインドア砂場を設置(3施設)、それまでソフトボール練習場であった半屋内的施設を砂場とともに築山やすべり台なども併せて設置(1施設)となっている。

他の問題としては、そもそも、なぜインドア砂場の設置が必要なのかといった、根本的な設置理由の理解を保護者や理事会等から得ることや、わずか数ヶ月後の夏休みまでには設置したいというタイトな工期スケジュールといったことがあげられていた。

(5) インドア砂場設置の段階で発生した問題

実際の設置段階で発生した問題点としては、次のようなものがあった。

- 砂の搬入作業の大変さ。(大量の砂の搬入を、人海戦術で行った)
- 大型トレーラーによるコンテナ砂場の搬入作業。(細い通路の通行)
- 砂場枠(木枠)が精密な寸法で作られているため、少しでも枠がずれたり、ゆがんだりするとうまく組立ができず、設置作業に思いの外時間を要した。また、他の保育活動のために場所を空けるために定期的に砂場の設置－解体を繰り返すことの大変さと、解体時における砂場枠及び砂の置き場所の問題など。(それでも砂場は大事であるとの認識から作業を続けている)
- 砂に対する安心感を得るために、遠隔地産の砂を用いたため、その運搬費用が高かった。
- 抗菌砂の費用の捻出。
- 設置工事の際に、大きな石が出てきて撤去に苦労した。

多量かつ重量の大きな砂という素材の扱いと、運搬費用の負担の大きさに問題が集中している。恒常的な設置ができる所はその苦労も1回で済むが、短期的な設置－解体を繰り返すとすると、その困難は相当なものである。容易に組立できる砂場枠の開発なども今後求められる。

(6) インドア砂場の設計や設置工事、設置費用等

設計及び設置工事に関しては、先に述べたように手作り感の強いものから、専門の設計者や

建築業者らによるものと多様である。砂場という遊び場の特性をどれだけ理解し、考慮するか、また砂場自体と砂場を含む遊び場全体の空間をどのように構成するかが、この点でのポイントとなる。

いずれの設計からも、砂遊びとともに、身近に自然を感じたり、子どもと保育者・保護者、また保護者同士のコミュニケーションなどを考えた空間づくりの視点が伺える。また砂で遊ぶ子どもの目線と見守るものとの目線が会うような高さを考慮するといった工夫も見られた。

設置費用に関しても、数万円から数百万円規模へと、その幅は大きい。建築物としての砂場の建物と、消耗品となる砂及びその運搬費用等は、施設規模、対象児・者の年齢や利用者数、活用目的等によって違いがみられ、それぞれの努力を要するところである。詳細は割愛するが、この経験とデータは、今後新たなインドア砂場設置の際の重要な目安となる。

(7) どのようなインドア砂場か、設置の工夫、特長

まず、インドア砂場の設置場所として、体育館等の一角に設置したもの、保育室等の一室を確保して設置したもの、新たに専用の平屋建ての建物を建築して設置したもの、大型の遊び場施設の一角に設置したものに大きく分けられる。

砂場の広さも、保育施設の場合は約6平方メートルから約15平方メートル前後、大型の遊び場施設では30～60平方メートルと幅がある。

大型施設の場合には、砂場の周辺にくつろげるスペース、水遊びもすることのできる遊具の設置、手洗いや足洗い場等の設置が見られる。保育施設の場合、毎回タライに汲んだ水で幼児の足を洗っていた園もある。

砂場内の砂には、川砂・山砂、外国産のホワイトサンド、商業的に開発された「ダンシングサンド」といくつかの種類があった。川砂・山砂に関しては、放射線からの安全性確保のために、山形県や遠く九州産のものなどが使用されている。また、ほとんどの施設において抗菌砂を混入させている。

各施設における特長を、いくつかに分類して見ておきたい。

①砂の素材

〈ホワイトサンドを使用〉

- ・サラサラしており、粒子が細かい、固まりやすい

〈ダンシングサンドを使用〉

- ・使用した砂は、98%の砂と2%の無害な結合剤で構成されており、乾燥せず、柔らかい塊で留まることができ、濡れた砂のような流れと形状が綺麗な跡を残す。
- ・一般の砂とは異なりサラサラしておらず、砂全体がまとまり易い性質を持っており、耐水性がある。そのため、形状を維持することができ、子どもの創作意欲をかきたて、楽しく砂遊びができる。
- ・衛生面では、抗菌性があり、手を清潔に保ったまま遊ぶことができる。

②砂場空間・建物

〈砂場専用に建設した建物〉

- 断熱材二重張り。
- 屋根遮熱塗装。
- ガラス断熱フィルム貼付。
- 暗渠排水設備完備。
- エアコン2台完備。
- 第二種換気設備。(高気密フィルター付給気)
- 紫外線殺菌灯設置。

〈ソフトボール練習場を改装〉

- 床面が土であることを活かし、屋内でありながら自然のような起伏がある空間で、子どもたちがのびのびと遊べる遊び場となっており、中央に大きな砂場がある。

〈保育室を砂場に改装〉

- 壁面に職員が手づくりの装飾を施し、あたたかみのある屋内砂場とした。

③砂場の枠

- 木枠の縁に座ることができる。
- 木枠の高さがあり、あそびの中でカウンターにしたり、仕切りにして「みたてあそび」を楽しんだりしている。

④砂場で活用する道具類

- 砂場枠のすぐ側に、砂場用具を設置。
- 塩ビ管、木ごて等の配置により活動意欲が向上。創意工夫の充実に発展する。

⑤砂場周辺の空間と多目的性

〈椅子等の配置〉

- コミュニティーの役割を持つ砂場になるよう椅子テーブルを配置し、保護者が活用できる。
- 周辺に設置したベンチから保護者の見守りを受けることにより、子どもが安心して遊びに熱中できる。また、親子遊びへの発展を促す。

〈砂場周辺の透明アクリル板による間仕切り〉

- 他コーナーへの砂の流出を防ぐ。
- 他コーナーからの参加意欲につながる。

(8) 設置後の様子

この項目では、大きく子ども、保育者、保護者それぞれの反応と保育実践や保育計画への影響、地域への影響について尋ねた。

a) 子どもの様子

初めて砂に触る子ども、久しぶりに砂に触る子どもがおり、いずれの場合にも、最初、砂の接触にためらいを見せる場面が見られたが、すぐにほぼ全ての子どもたちが砂遊びを楽しんでいたとの回答である。どのインドア砂場も裸足が原則となっており、手足で直接砂を感じている。まずは砂の感触を確かめ、型抜きや砂を深く掘ったり、一部施設では水を流して遊んだり

している。

また、ある保育施設からは、インドア砂場での遊びが始まって以降、それまでよく見られた子ども同士の些細なトラブルが解消されているとの報告もあった。

大型の遊び場施設では、他の遊具での遊びも見られるが、ひとしきり遊んだ後は、砂場でじっくり集中して遊ぶ子どもの姿や、最初から砂遊びを目的として来るリピーターがいるという。そこでは、前回の活動の続きを楽しむなど、個人の中での遊びの発展も確認されている。

b) 保育者の反応、保育実践・保育計画等への影響

ほとんどの保育者が、子どもたちの反応の良さから、喜びをもってインドア砂場を受けとめている。ただし、最初のうちは、アウトドア砂場とインドア砂場の違いに戸惑うこともあったという。特に屋外活動をそのまま屋内で同じように再現しようとした時、大きなストレスを感じている。だが、やがてアウトドアとインドアの砂場は基本的に別物である、という認識に到達した時、初めてインドア砂場独自の特徴を踏まえた活用や保育計画を考えることができるようになったという。これは興味深いことである。

砂場の広さの関係から、人数を制限しながら保育を行わなければならないもどかしさもあるが、その工夫をどのように行っていくか、そこからインドア砂場における保育方法を研究課題として意識するようになってきているという。

c) 保護者の反応

保護者にとっても、ほとんどの施設においてインドア砂場は、好感をもって受け止められている。保育施設においては、子どもが安心して遊ぶことができる遊び場が増えたことを喜び、また遊び場施設では、砂遊びを見る大人の見方が変わったことがあげられている。特に保護者自身、間近に子どもが集中して遊んでいる姿を見たり、自分自身も子どもと一緒に遊んだりすることで、砂遊びの面白さや大切さを感じているようである。父親自身がリピーターとなっているケースも多く見られている。

また平日は、祖父母と孫の利用ケースもあり、これは他の遊具との大きな違いである。他のコーナーでは見守り役となる場面が多い祖父母が、砂場では主体的立場となって砂にも子どもにも関わっているのだ。

さらに、インドア砂場での家族間の交流も報告されている。隣同士になった家族が話し合ったり、そこで異年齢の子どもの輪が広がったりしている。さらにそのような場が、他の大きな子どもを見ながら自分の子どもの先を見通したり、逆に小さい子どもを見ながら自分の子どもの成長を実感したりする場になっているという。

d) 地域への影響

保育施設におけるインドア砂場は、基本的に在園児の活用となるが、幼稚園では地域での未就園児への開放や子育て支援、近隣の保育施設の子どもたちへの活用を可能にする試みも出ている。大型の遊び場施設では、幼稚園や保育園の団体受け入れや、雨天時における遠足の代替目的地としての活用など柔軟な対応をしているところもある。

インドア砂場が知られるにつれて、多方面からの視察者もあり、単に原発事故対策としてだけでなく、保育の新しい環境、子育て支援環境としての注目も集めていることに注目しておく

たい。

(9) インドア砂場の活用・運用の方法や工夫

保育施設においては基本的に保育時間としての活用となるが、遊び場施設では、一般開放や地域の保育施設との連携活用が行われている。一般開放では、利用希望者が多いところでは、1日4回程度の時間区分(1回につき1時間30分)による利用制限を設けているところもある。

利用対象者としては、全く制限のないところ、乳幼児とその保護者限定、小学生までを可とするところ、保護者同伴を原則とするところ等、それぞれのインドア砂場の設置目的による違いが表われている。

利用方法としては、裸足もしくは専用の靴での入場を基本とし、水の使用はほとんどの場合、砂を湿らせる程度に制限している。また、手足を消毒してから砂場に入る、裸やおむつでの入場は禁止といった決まりを定めているところもある。

(10) インドア砂場のメンテナンス方法

インドア砂場のメンテナンスとして最も気を遣うのが、衛生管理である。この問題では特に、砂場での水の使用・排水・砂の乾湿管理が大きなポイントとなる。湿気が細菌やカビ等の繁殖を招くことからその管理が強く求められる。一方、砂は湿り気を持たせなければ埃が舞い上がり、また砂を固めて遊ぶなどの楽しみを味わうことができない。各施設ともこの点で苦労が大きい。なお、基本的に大量の水の使用はどこも制限している。

散布する水として、「次亜塩素酸水」を用いている施設が複数あり、無害な砂の衛生管理に効果的であるとのことで、今後筆者としてもその検証を行いたい。

また、砂の搬入段階で熱処理された砂や抗菌性のある砂を取り入れたり、全く水なしで砂が固まる特殊素材の砂(ダンシングサンド)を採用したりと、砂そのものへの関心も高い。

他には、砂の定期的な天地入れ替えや砂場周辺の清掃なども基本的な作業としてあげられている。

また、インドア砂場のある空間の管理として、エアコンによる換気の徹底や結露の防止、エアーカーテン、排気設備、紫外線殺菌灯の設置等で空間の環境管理を徹底するところも見られる。

メンテナンスの方法はコスト管理とも関わる問題であり、各設置者はその点での苦労も大きい。

(11) インドア砂場の利点と改善を図るべき点

この項目については、利点と改善及び今後研究を進めるべき点について、特徴的な回答をあげておく。

①利点

- 放射性物質を気にすることなく遊ぶことができる。
- 天気や気候に左右されず、常に砂遊びが可能となった。

→猛暑や雨天・積雪等を考えれば、アウトドア砂場は実に8ヶ月以上使用できない。

- 犬や猫対策の必要もない。
- 保護者同士のコミュニケーションや、子どもの情緒の安定に役立った。
- 親子で砂遊びをする機会が増え、特に父親と子どもの遊びや祖父母の参加が増えた。
- 砂遊びや、遊び全般に対する保育者・保護者の見方と意識に変化があった。

②改善や研究を進めるべき点

- 砂場を含めた、より開放感のある遊び空間の創出。
- 深さのある砂場。
- 砂を無駄なく洗い落とすことができるような砂場の中の手洗い設備。
- 安価なコストでの衛生管理と衛生管理指針の策定。
- 足洗い場の位置や水圧の調整。
- 水の使用が可能となる構造。

(12) 今後、全国の保育施設や子育て支援施設等でのインドア砂場の設置及び活用のアドバイス 本項目についても、いくつか特徴的なものをあげておく。

- インドア砂場のような、多様な遊び場の設置は、コミュニケーションが苦手な子や緊張気味の子など、多様な子どもの対応にも効果がある。
- インドア砂場と屋内遊び場の両機能を備えた多目的子育て支援施設が理想的。
- 衛生管理や遊んだ後の子どもの動線、砂のメンテナンスなどを事前に十分考慮すべき。
- 季節や気候条件に柔軟に対応できる、開閉式の屋根や壁面等の半屋内・半屋外的な構造の検討。
- 広さが十分に得られない時は、大型遊具等の設置をせず、むしろ何もないシンプルな砂場のみの設置が望ましい。
- 発達段階に即して、0～1歳児向けのベビーコーナーを配置するのも良い。

(13) その他、インドア砂場に関する自由発言

- 近年では、犬猫に加え、鳥の糞やPM2.5などの環境汚染も問題となっており、安心安全で、しかも子育てを支えるような機能も備えた施設機能を考えたい。
- 放射能問題の不安を抱えて子育てをしているお母さんたちがたくさんいることから、インドア砂場の存在はお母さんにとっても子どもたちにとっても心身のストレス解消の場として大きな役割を果たすものと思われる。
- 他の遊具コーナーにおいて、子どもは、ある程度の達成感が得られれば一定の満足に落ち着く。しかし、砂遊びには到達点というものは存在せず、ひとつの活動が新たな発想や意欲を生み、その可能性は常に無限大である
- インドア砂場とアウトドア砂場、並列した遊び方が大切であると思う。
- 砂遊びを通して学ぶことがたくさんある。自分たちが育ってきた幼児期を振り返り、ぜひ子どもたちにたくさん砂遊びをさせてほしい。

3. 「福島インドア砂場サミット(FISS)」のまとめ

サミット当日は、アンケートの対象となった8施設に伊達市及び白河市の関係者を加えて現状や思いを語っていただき、全体ディスカッションを行った。そこで、改めてインドア砂場の可能性を確認するとともに、今後の課題について話し合った。以下、その内容を簡単にまとめた。

(1) インドア砂場の可能性

①砂場遊びのもつ子どもの発達可能性

まず、何よりも、砂遊びは子ども自身が大きな楽しみを感じる遊びであり、しかも子どもの心身の発達にとっても大切な影響を及ぼすことを、様々な事例を伴って話し合った。そして特に震災以降の福島においては、その認識が保育者のみならず多くの保護者の間に広がっているという。だからこそ、砂遊びの機会を保障するインドア砂場が必要であり、今後も、積極的にインドア砂場の設置や条件整備を行っていくことが大切であるという意見の一致をみた。

②インドア砂場の特殊性の理解と新たな視点

インドア砂場にアウトドア砂場と全く同じ役割を求めることは不可能である。特に、多量の水の使用や砂場からの砂の持ち出し、大勢の子どもの自由な出入り等は難しい。そこで、インドア砂場は、アウトドア砂場とは基本的に違う「遊具」であるというらえ方をしながら、インドアでも(だからこそ)できる砂遊びのバリエーションを広げていくことの大切さを、以下のような事例をもとに話し合った。

- 砂を柔らかく耕し、大きな起伏を付けたところを子どもたちが歩くことで、足腰の運動量を増大させる。
- 砂を適度に湿らせながら、多様な砂型づくりの遊びやサンドアートの作品作りにじっくりと取り組む。
- 日によって違った種類の道具類を適宜、配置することで、子どもたちにとって毎回違った砂場環境を創り出す。
- 乾いた砂、湿った砂、固まる砂、砂の温度や色の違いなど、より丁寧に砂に触れることを意識させて砂遊びを展開する。

以上のような遊びの広がりや、大人(特に保育者)の、砂遊びをみつめる視点の変化でもあり、インドア砂場がもたらした大きな効果の一つとも言える。

③砂場空間の多目的性

インドア砂場の設置によって、母親達はもちろんのこと、これまで砂場にあまり近づくことのなかった父親や祖父母までが、砂場に集まり、そこに新たなコミュニケーションが生まれている。同時に砂場は、保護者が改めて我が子を見つめ、他の子どもと我が子の関係を間近に見る機会ともなっている。

また、インドア砂場のある比較的広い空間に、石ころや木の皮、木の葉など可能な限りの自然物をハンズオン(手で直接触れることができる)の形で置くことにより、自然を感じる空間とし

て活用することも可能である。

このように、インドア砂場は、子どもの遊び環境としてだけでなく、子どもに関わるいろいろな人と人との出会いや、くつろぎ、コミュニケーション、そして緑や様々な自然物と出会えるような空間にもなっていくといった、多様な発展の可能性が話し合われた。

(2) インドア砂場に関する今後の研究課題

①衛生管理の課題

アンケートの考察でも触れたが、サミット会議においても、砂場の衛生管理について議論された。砂の殺菌方法と安全性の確保、衛生管理に関する一定の基準(ガイドライン)策定のための研究の必要性が論じられ、これらの課題については筆者も今後、研究チームを結成して取り組むことを明言した。

②砂の放射線量と安全性

この点に関して、今後こども環境学会所属の研究者に協力を仰ぎながら、インドア、アウトドア双方の砂の定期的な放射線量測定を実施し、データの蓄積を図っていきたい。

③インドアとアウトドアをつなぐ多様性のある空間創出

前述のように、砂場空間は子どもの砂遊びの他にも多様な可能性を秘めた環境であり、これを、半屋内-半屋外的な広い空間として設置することで、広く保育・教育や子育て支援、地域コミュニティ・コミュニケーション創造に活用できると考えられる。実際その先行的な事例として、前述の釧路市こども遊学館のインドア砂場空間がある。今後、このような施設創造の研究を関連学会、企業等とも協力して取り組んでいく。

(3) 新しい砂場環境創出のために

①インドア砂場サミットの意義

本サミットでは、多くの参加者から、今回のような会議は有意義であり、これを一回限りで終わらせることなく、継続して開催していくべきとの意見が出された。また、会議で議論したような内容を広く社会や国の関連する機関に訴え、実際に子どもの遊び環境の保障につながるような動きとなっていくことへの期待も語られた。

主催者としては、このような声をしっかりと受け止め、研究発表や学会・NPO等との共同を図りながら、是非とも期待に応えていきたいと考える。

②参加者一同による「呼びかけ文」

サミット会議では、最後に参加者一同による「呼びかけ文」(資料1)を採択した。

おわりに

本サミット会議開催に当たっては、福島県、福島市、本宮市、福島県教育委員会、福島市教育委員会、本宮市教育委員会、NPO 法人郡山ペップ子育てネットワーク、NPO 法人生涯学習プロジェクトもとみや、公益社団法人こども環境学会、IPA Japan(子どもの遊ぶ権利のための国際協会日本支部)からの後援をいただいた。有意義な会となったことは、一重に各般からのご理

解とご協力をいただいたことによる、また本サミット会議は、本学の教育・研究推進センター助成事業の一環で行ったものである。全てのご支援に対し、記して感謝申し上げます。

大震災と原発事故による放射能問題という苦難の中で、必死に保育・子育て環境を模索しながら、改めて到達した子どもの遊びの重要性、そして砂場という遊び場の必要性。このことの気付きとインドア砂場づくりという挑戦は、福島県内はもとより、全国のどのような地域においても活かされる貴重な経験である。本研究を通して、そのことを少しでも福島から発信できれば幸いである。

参考文献

笠間浩幸 「遊びの力」『チャイルド・サイエンス』日本子ども学会 Vol.9 pp.10-13 2013.3

河原啓二・笠間浩幸 「被災地での砂場プロジェクト」『保健の科学』杏林書院 第55巻 第8号 pp.555-559 2013.8

笠間浩幸 「たかが砂場・されど砂場・砂遊び ―砂場から見える子どもの成長と発達―」『子どものからだと心 白書2013』子どものからだと心・連絡会議 pp.44-46 2013.11

(資料1)

「福島インドア砂場サミット(FISS)」は呼びかけます！

2013(平成25)年、11月15日、福島市で開催された「福島インドア砂場サミット(FISS)」に集った私たちは、子どもの砂遊びの重要性や砂場環境の大切さを改めて強く感じました。

子どもにとって遊びは、生きることそのものであり、人として成長・発達していく上で欠くことのできない要素です。それは生まれながらの本能でもあり、全ての子どもが満たされるべき大切なものです。「子どもの権利条約」も、第31条において「遊び」は「子どもの権利」と定めています。

遊びの中でも、子どもたちが砂や水、土、泥に触れることは、感覚器官を刺激し、想像や創造性の源となります。また、これらの素材を介しての遊びは、コミュニケーションや協同といった社会性、認知や科学的思考、美的センスの醸成、そして安心感・達成感・有能感といった自己形成に大きな役割を果たします。

一方、このような大きな遊びの可能性をもつ遊び場である砂場は、近年、犬や猫の排泄による汚染、ガラス片やタバコの吸い殻等の危険物の混入等、そして東日本大震災による原発事故以降は、放射線の問題から、必ずしも子どもが安心して遊べる環境とはなっていません。

また、季節や天候、さらには砂場のメンテナンスが十分でない等の理由から、屋外の砂場活用は、必ずしも活発ではありません。

このようななかで、本日のサミットにおいて、インドア砂場の可能性が明らかになりました。

そこで本日の集まりを閉じるに当たり、次のことを、子どもの遊びに関わる全ての人たちに呼びかけます。

- ◆ 一人でも多くの大人、そして社会が、子どもにとっての砂遊びの大切さに目を向け、理解できるよう、様々な機会をとらえてその重要性を訴えます。
- ◆ 季節や天候、外的な条件に左右されず、安心して楽しく遊ぶことのできる多様な砂遊びの環境を子どもたちに保障できるように取り組みます。
- ◆ 豊かな砂遊び環境の創造を通して、日々、子育てや保育に取り組んでいる人たちをより強く支援します。

最後に、今朝頂戴した、福島県子育て支援担当理事小林武政さまのご挨拶の一部を引用いたします。

「福島県は、原発災害という子どもにとって大変不幸な状況におかれることになりましたが、これをチャンスにかえて前に進んでいかねばなりません。今、福島県ではこども環境学会の協力を得て、冒険ひろばや屋内遊び、保育現場での取り組み方など、県として積極的に「遊び」について事業を展開しています。震災をきっかけに、子どもにとっての「遊び」を見つめ直している福島県から、質の高い遊びを全国に発信していきましょう。」

「福島インドア砂場サミット」は、まさにそのスタートです！

以上

2013年11月15日 「福島インドア砂場サミット」参加者一同